

# 我々はどうすれば神との戦争に勝てるか？

Greatchain

2022/09/25

この題は皮肉であるが、この皮肉でしか言い表せない、困ったことが、いま世界では起きている。これを言い換えると、「我々はどうすれば、ルシファー側に立ち、怨敵プーチンを敗北させることができるか？」ということである。

プーチンは恐ろしいことを言った。「我々は核兵器を使う用意がある。これを単なる脅しと思うなよ。」そう言って、人民の反対を押し切って、大量のロシア予備軍の強制的徴兵に踏み切った。

彼はすでに、彼自身の暗殺未遂を含め、右腕と言われる側近の（間違っ）娘の暗殺、多くの軍事指導者の暗殺、そしてこの数か月で、あまりにも多数の、彼の将兵たちの戦死を経験している。

わが国の報道は、彼を狂った、残酷な独裁者として、バイデン、ゼレンスキー両大統領と全く同じ立場に立って、これを非難している。その観点から見れば、プーチンは暗殺して除くのがベストであろう。プーチンさえいなくなれば、ウクライナ問題も、核兵器の脅威も、ロシア兵のこれ以上の無駄な死もなくなり、すべてが解決する。

しかしこの方法は、プーチン自身が反対している方法である。それは彼自身の利益のためではない。彼自身がもしいなくなれば、この地球がルシファーによって完全に占領されるからである。

彼には、自分の崇高な（しかし反対側からは犯罪的な）天命として自覚し、公言していることがある。それは、この世界からグローバリストを一掃し、世界を一変させることである。そのためには自国民の犠牲もやむを得ない。

猫の首につける鈴のような、このプーチン暗殺案は、特に、わが国の岸田総理グループにとって、この上ない名案であるはずだ。それが実現すれば、この世界に一気に自由が訪れるであろう。しかし誰にとっての自由か？ それは明らかに、民衆の享受する自由ではな

い。ごく一部のエリートの享受する自由である。それが「ザ・グレート・リセット」と美称で言われているものである。

プーチンは、もうそういう時代ではなくなった、今は人類の意識が大きく目覚める時代だ、と言っているのである。「一極集中の時代ではなくなった」と彼が力説するのは、そのことである。これは事実である。最近、「目覚め」という言葉を耳にしない日は、ほとんどなくなった。目覚めとは、内部からの目覚めのことであって、外から人を強制して従わせることではない。

それは魂の目覚めのことである。しかし新聞や政府の指導によって民意が形成されるわが国では、そんなものはあり得ないことになっている。「何？ 魂？ そんな屁のようなものを信じてはいけない。我々の存在は、アンソニー・ファウチ博士の主張するような〈科学〉によって形成されるものだ」——そう言って我々を、人工的遺伝子に支配され、魂を抜かれた人間に造り変えようとしたのが、政府主導のワクチン半強制運動であった。ファウチ博士が、「ワクチン運動は見事に効を奏した」と、本音を吐いたのをご存知だろうか？

New World Order という古い秩序が推し進めようしてきたのは、人々が目覚めようとするのを妨げ、人々を眠らせておこうとする必死の試みである。いま彼らは、ルシファーという彼らの神と心中しようとしている。彼らは文字通り「必死」であって、何をするかわからない。自分たちと共に、世界全体を道づれにしようとしている、と考えていいだろう。彼らはプーチンを追い詰めて、核戦争による大破壊を起こさせようと、本気で考えている。彼らは自分たちだけの核シェルターを用意している。彼らのようなサイコパスが、我々と同じ人種だと思っはならない。

さて我々は今、何をすべきか？ いまこの瞬間にも、人類全体の運命が頭上に、「ダモクレスの剣」のようにぶら下がっている。それは「キューバ危機」などをはるかに超えている。我々にできることは、あるのか？ できることは、**せめて**、プーチン大統領について公平に論ずることである。そして彼の苦境がどれほどの、またどのようなものであるかを理解することである。

「プーチンよ、ロシアよ、お前たちはロシアの魂などという**下らぬもの**を放棄すればいいのだ。そうすればすべてがうまくいくのだ」と、Luciferian のグローバリストが言っている。そしてゼレンスキーもこれに同調し、ロシア文化そのものを——ドストエフスキーもトルストイも——ウクライナから一掃せよと叫んでいる。

我々の現首相のように、プーチンを「国際的に断じて許すことができない」犯罪者のように言うべきではない。日本人の誰かがやったと言われるように、もしプーチンを呪って「丑

の刻参り」をするような輩が増えるならば、その集合意識が現実のものとなって、我々自身にはね返り、我々自身の滅びの種となるだろう。プーチン自身がこう言っている——「核兵器をもって我々を恐喝しようとする者たちは、風向きが逆になるかもしれないことを忘れてはならない (Infowars)」

今起こっていることは、神とサタン、善と悪の闘争である。私はエドガー・ケイシーの予言——「紆余曲折の後、希望の光はロシアから差してくる」——を信じている。予定調和というもの、摂理歴史というものを信ずる。核兵器による破壊についても、デイヴィド・ウィルコックの言う「神の介入」を信じている。

<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/220507.pdf>